

## ハンス・カロッサ

### - ナチス政権下における「精神的抵抗」 -

三石 善吉

‘Innere Emigration’ - in the case of Hans Carossa -

Zenkichi Mituishi

Under the regime of the Nazi, Hans Carossa sat on the ‘Vorsitz’ of the ‘Europäische Schriftsteller Kongress’, and has been thought to be bribed by the Nazi. Because of the above fact, G. Lukacs, P. Zimmermann, and F. Schonauer, have severely criticized him. This essay aims at wiping out that unjust reproach, by examining Carossa’s literature and his private letters in the Nazi period.

#### 1 ハンス・カロッサ：略歴と評価

ハンス・カロッサ Hans Carossa (1878年12月15日～1956年9月12日)、バイエルンのイザル河畔のテルツ(Tölz)に医師の長男(妹一人)として生まれ、19才の時、両親の希望でミュンヘン大学医学部に進学。15才の時、詩に興味をもち、20才、在学中には詩人と医者との調和に希望を持っていた。25才、1903年4月ライプチヒ大学で医師免許試験の全部門に合格卒業(医学博士)し、パッサウの父の許で代診をする。詩人を志すも医業も多忙で、医師の傍ら文筆活動に従事する。1906年、28才の時結婚、長男誕生。この頃からカロッサの詩が新聞雑誌に掲載され始める。1910年インゼル社から処女作品『詩集 Gedichte』を出版する。1915年、第一次大戦

に軍医を志願し従軍するも、1918年4月負傷し、除隊。1922年『幼年時代 Eine Kindheit』出版。『ルーマニア日記 Rumänisches Tagebuch』(1924)、『青春の変転 Verwandlungen einer Jugend』(1928)、『医師ギオン Der Arzt Gion』(1931)、『指導と信託 Führung und Geleit』(1933)、1941年7月、妻ヴァレリ-病没(1929年から重い病床に伏し、以後何度も危篤状態を繰り返していた)この年、『美しい惑いの年 Das Jahr der schönen Täuschungen』(1941)出版。1933年1月から1945年5月までのナチス時代のカロッサについては、以下の本文で触れる。ナチス時代の生活概観である『狂った世界 Ungleiche Welten』(1)の執筆はナチス政権下の1944年から始められ50年末脱稿、1951年に出版された。1956年9月12日78才で病没。

ナチス期、ハンス・カロッサはナチスの協力者であったとして、多くの人がおおむね否定的評価を下している。ジョルジ・ルカ・チは第三帝国崩壊直前に完成した『ドイツ文学小史』(2)のなかで、

文学にとって、もっと危険だったのは、才能はなくはないが、性格の弱い若干の作家たちが、ヒットラ - 主義のシステムティックな買収の努力に屈伏したという事実である。ハンス・カロッサや他の人々がそれである、

と述べて、カロッサら「性格の弱い」「若干の作家」たちが、ナチスの「システムティックな買収」に籠絡されたと見た。

ルカ・チの上記のカロッサ評は、ナチス・ドイツの苛烈な条件下で、彼の言う「買収」の一例として付け足し的に言及されているだけで、カロッサ論そのものが展開されているわけではない。われわれは、後に、果たしてカロッサは「気が弱」かったために「システムティックな買収」に取り込まれたのか否か詳しく検討することにしよう。ただ、われわれの「アルカディア - 幻想 = 精神的抵抗」なる文脈で、ぜひここで言及しておきたいのは、「歴史への逃避」やいわゆる「ドイツの内面世界」への「逃避」「脱走」にもさまざまなケ - スがあって、一人一人厳密に研究されなければならないということである。たとえば古典学に依拠するエルンスト・ロ - ベルト・クルティウスやフリ - トリヒ・クリンクナ - 、ブル - ノ・スネル、法哲学のグスタフ・ラ - トブルフ、作家のシュテファン・アンドレス、ヨッヘン・クレッパ - 、ヴェルナ - ・ベルゲングリユ - ン、ラインホルト・シュナイダ - 等の場合(3)には、「気が弱かった」かどうかは別にして、「逃避」「脱走」などではなく、そこには迫り来る恐怖に打ち震えながらも、なお烈烈たる「精神的抵抗」「文学的抵抗」が見られた。歴史学者であろうと、古典学、法哲学者であろうと、ルカ -

チも指摘する、ナチス体制のような「すべての言論のいままでの最も完全な弾圧」下においては、そのような「精神的抵抗」「アルカディア - 的精神態度」が唯一の抵抗の方法であったと判断される。従って、カロッサが果たして本当に「買収」されてしまったのかどうかについては、十分に検討されなければならないことなのである。以下では、カロッサがナチス期、果たして「買収」されたのか否か、「国内亡命者」として「精神的抵抗」を行なわなかったのか否かを検討することにする。ベ - タ - ・ツィンマ - マンの「第三帝国の文学」(1981年)(4)と題する一文は、ナチス政権下の「保守的 = ファシズムの文学」、「国粹的戦争文学」、「労働者文学 (= 鋼鉄のロマン主義)」、「血と大地の文学」、「歴史文学」、「ナチス党の文学」等について論じた後に、とくに「国内亡命」の文学の一節を置き、その中でハンス・カロッサの文学に論及し、辛辣に、カロッサの「作品の中から(精神的抵抗の - 三石)証拠を提出することはほとんどできない」(674頁)として、カロッサを「国内亡命者」として扱うことを拒否している。われわれはまず、このツィンマ - マンのカロッサ評を検討することから始めたい。ツィンマ - マンのカロッサ批判の論拠は次の三点にある。いずれもカロッサの戦後の回想録(1944年執筆開始、50年末脱稿)『狂った世界 Ungleiche Welten』(5)によっている。

## 2 ツィンマ - マンのカロッサ批判 - 三つの論拠

### 第一の証拠。

カロッサはそこでとくにゲ - テを名指して、ゲ - テが「悪意の渦巻く地獄の連中も、...しばしば、欲せずして、神の如き人に道を切り開かねばならぬ」いのを知っていたといい、そのゲ - テにして「しかし、創造の国において、悪を善と対等

の大国と認める榮譽をこの悪に示すことはなかった」と強調するが、このことでカロッサはまず第一に自らの作品の婉曲な傾向を擁護したのであった（ツインマ - マン、675頁、『狂った世界』邦訳本、100頁参照）。

ここでツインマ - マンのいう、カロッサの作品の「婉曲な傾向」とは、カロッサ自身、自己の作品のなかで悪（＝ナチス）をはっきりと断罪しなかった事を指していると考えられる。この点については後に再び論ずることにする。

第二の証拠。彼は同じくカロッサの次の文章（『狂った世界』31～33頁）を引用して述べている。

それでもやはりこうした種類の人々は、より高い任務を果たしている。彼らは、右往左往している諸勢力を明確な方向へ向けるために彼らを利用する未知の力の道具である。もちろんたいいていの場合、彼らが思っているのとは違った方向へ向かうのだが...彼（ヒトラ - のこと）は、旧教新教を問わず一掃しようと思っていたが、その迫害のゆえに、新旧両派は純化と自省、それどころか相互理解の道を開くことが出来た。...彼は幾百万ものユダヤ人を、成人も子女も殺させたが、このことによって、全世界のすべての善良な人間がユダヤ人に無限の同情をもって対する状況を作り上げた。彼の暴威がなければ、おそらくいまだにイスラエル国家は存在していないだろう（ここまでカロッサの文の引用、以下はツインマ - マン自身の文 - 三石）。

こうした見方をするなら、ナチズムは、ドイツ国民ばかりか全人類の純化過程を引き出す祝福に満ちた試練になる。第三帝国を宗教的な意味で解釈しようとするこうした努力は、カロッサが道徳的に非の打ち所のない個性としての自らの名声

をナチの文化政策の用に役立てたという事実によって分かりやすいものになる。1941年、カロッサは、占領した隣国の文学をナチの統制下に組み入れようとしたナチ党肝煎りのヨ - ロッパ作家連盟の会長に選ばれて、これを受け入れている。（ツインマ - マン、676頁、『狂った世界』31～33頁）

第三の証拠は、上記引用文の最後に見える、カロッサが1941年秋ナチス肝煎りの「ヨ - ロッパ作家連盟」の会長（＝議長）に就いたことである（後述）。

以上三点、要するにツインマ - マンのカロッサ評価の方法は次のようになる。つまり悪なるナチス体制は、その予想せざる「良き」帰結として、カロッサ自身の「婉曲な」・「内面的な」文学を生み出し、かつのみならず、新旧両派の和解とイスラエル国家を生み出すための一つの「祝福に満ちた試練」であったとカロッサ自身が考えているとツインマ - マンは判断している。この論理に従えば、ナチスの想像を絶する「強制的画一化」も「ジェノサイド」も全て「結果論」として「良き」試練として肯定されてしまうのではないが、ここにはいかなる意味においても「精神的抵抗」・「国内亡命」の姿勢は見られないではないか、「ヨ - ロッパ作家連盟」の会長に就任してナチスの協力したのも、この文脈からすれば、当然のことだということになると。

### 3 ツインマ - マンのカロッサ批判の第一点の検討

このツインマ - マンのカロッサ評価は厳しすぎるのではあるまいか？ いや、それ以前に、われわれの見るところ、ツインマ - マンのカロッサ批判そのものに幾つかの重大な疑問点がある。一つは「断章取義」、一つは「資料の取り上げ方」、一つは「分析視角の誤

り」、一つは「単なる挙げ足取り」である。この四点は相互に絡み合っているが、まず、ツィンマ - マンの挙げる第二の論拠から検討する。

「断章取義と分析視座の誤り」：ツィンマ - マンの論拠は、いずれも『狂った世界』から引き出されているが、上記の第二の証拠の方が、第一の証拠よりも同書の最初の方（邦訳本、31～33頁）に出てくるので、これを先に見ていくことにする。

カロツサはツィンマ - マンのこの引用した部分のずっと前（22頁）から、「Finis Germaniae ドイツの終わり」がなぜ起こったのかを具体例を挙げながら考察している。その一例として、日頃行きつけている薬局の、普段は落ち着いて愛想のよい助手が、今日はいたく興奮し錯乱し、まるで熱病にでも罹ったみたいである。わけを聞くと昨夜社会民主党の「ミュンヘネル・ポスト」社を襲撃し徹底的に破壊してきた、「昨夜は私の生涯で一番楽しい夜でした」と白状した。カロツサはこの例を語りつつ、ホイジンガやオルテガ・イ・ガゼ等を援用し（オルテガは『大衆の反乱』（1930）の中で人間を「貴族」と「大衆」に二分している - 三石）人間性の広い・狭いを基準にして「二種類の人間」が人の心のなかに併存しており、イデオロギ - や政治的事件がこの「狭い人間性」をかきたてるけれども、結局はその運動自体の自己矛盾によって没落していくと分析している。そしてヒトラ - の運動もこの大衆の利用に他ならないと述べる文脈の中で、この第二の証拠の上記引用文に続くのである。

つまりカロツサが注目しているのは、このナチス大衆運動の二面性にある。一つは破壊の・自己没落の面であるが、もう一つはこの破壊運動の過程でこれに対抗し抵抗しようとする新しい勢力の台頭のことで、カロツサは「明確な方向」へと導く「より高い任務」を果たす人々と呼んでいるが、結局はこの新し

い人々（＝勢力）が最悪の条件の中で新しい時代（カロツサの言葉を用いれば「新旧両派」の「相互理解」やイスラエル国家の建設など）を創っていくのだという極めて弁証法的な歴史認識が展開されている。

ツィンマ - マンはこのわれわれが「歴史認識の問題」と見たものを「宗教的解釈」と見ているが、これは全くの「誤解」であって、ナチスの運動はなぜ起こり、なぜ巨大化したのかという反省の上に立った、歴史的・社会科学的・哲学的考察なのであって「宗教」の問題ではない<sup>(6)</sup>。ツィンマ - マンの分析視座の概念設定に疑問がある所以である。

「断章取義」については、例えば、上に述べた「歴史認識の問題」の部分からも明らかなのであるが、再度ここで上記「第二の証拠」でツィンマ - マンが引用した部分を検討してみる。その引用文の最初の七行目（「それでもやはり - - 」から「 - - 向かうのだが - 」）までは、「高い任務を果たす」「こうした種類の人々」つまり「人間性の広い」人々による「明確な方向」づけの努力を述べているのであるが、しかしカロツサがそこに至るまで延々と述べてきた文脈から切り離して、いきなり、この短い引用部分（ここに引用した最初の七行目までの部分のこと）を提示するだけでは、カロツサの言わんとしている真意が全く読み取れず、断章のためいささか意味不明となってしまった文章がそのまま引用され（最初の七行までの引用文。この引用部分だけではとてもカロツサの思考が分からない）それに続けて、いきなり、

彼（ヒトラ - の事）は、旧教新教を問わず一掃しようと思っていたが、その迫害のゆえに、新旧両派は純化と自省、それどころか相互理解の道を開くことができた。 - - （ツィンマ - マンによる省略 - 三石）彼は幾百万ものユダヤ人を、成人も子どもも殺させたが、このことによって、全世界のすべての善良な人間がユダヤ人

に無限の同情をもって対するようになった。彼の暴威がなければ、おそらくいまだにイスラエル国家は存在していないだろう（32～33頁）

と引用すれば、誰でも、引用のこの部分に圧倒され、ツィンマ - マンの言うようにカロッサはナチスの暴虐行為が「祝福に満ちた試練」だと述べていると理解してしまうだろう。しかし、われわれが見てきたように、これをカロッサの全体の論理と文脈に戻してみれば、引用された最初の七行目までの部分に繋がっていくその前の長い叙述こそが重要で、ヒトラ - ナチスの暴虐な政治に対抗する新しい勢力が新しい世界を創っていくのだというカロッサの歴史哲学的認識を述べている所であることが理解できる。ツィンマ - マンはその部分を十分に引用することなく、いきなり上記のナチスの暴虐を肯定するような部分だけを引用した。つまり、ツィンマ - マンのこの「引用 = 分析」は「断章取義」の見事な一例であって、公正さと正確さを欠くものと判断される。

#### 4 ツィンマ - マンのカロッサ批判の第二点の検討

次に、ツィンマ - マンの挙げる「第一の論拠」に移ろう。これは単なる挙げ足取りと思われるのであるが、理由が挙げられている以上、取り上げないわけにはいかないようである（『狂った世界』邦訳本、99～100頁）。ツィンマ - マンはこの第一の論拠で、カロッサは自分の作品が「婉曲な傾向」を示していることを、事もあろうにゲ - テを引き合いに出して弁護していると非難している。

さて、この引用部分は「しかし、作家たちは圧倒され伴われた生活の雰囲気の中でどうして花を咲かせたらよかったのか？ それなくしては真の才能こそまさに発揮され得ない、あの自尊の意識の残りをせめて心の中に

維持していくにはどうしたらよかったろう？」（95頁）という極めて痛切な自問（＝自省）に対するカロッサ自身の答えの一部分である。とくに「自尊の意識の残りをせめて心の中に維持していく」という、まさに「精神的抵抗」の神髄を表明する言葉に注目してほしい。カロッサはこの大問題に対する解答をゲ - テから引き出す。ゲ - テは「悪魔的」なるものと「星辰的」なるものの双方を熟知していた。しかし今悪魔的なものが跳梁する暗黒の時代であるとき、「重々しく憤激して」、「卑劣なものをなげく」ことをせず、「考え、感じ、努力する人間を、悟らせ、勇気づけ、活気づける」ゲ - テのような歌を歌うことが必要なだとカロッサは主張する。「婉曲な傾向」とはこの苛烈なナチス体制下においては、静かに、「婉曲に」、ナチスに距離を置く「内面的な力」をかきたてる傾向を言う。カロッサ自身の言葉を引けば、「暴力国家の唯中に敢えて語られた真に自由な深い人間的な言葉、秘密警察の蔭の下に根源的な独自の法則に従って作られた本物の芸術作品は何れも、あの時代の善意の人たちにとって純粋な激励であり、換えがたい慰めであった」（九五頁）と言うことである。カロッサが自分の作品も「純粋な激励」・「換えがたい慰め」を与える作品の一つであると確信していたら、それは思いあがりではなくて、自信でありかつ事実であった。1936年2月、ト - マス・マンがヘルマン・ヘッセに宛てた手紙の中に、「『コロ - ナ』の最新号にはいろいろ楽しいものがありました。私はあなたの魚釣り仲間の美しい歌が大好きです。それからカロッサの散文も気持ちのよいものでした」（7）とあるのはその一つの傍証となろう。

なお、ツィンマ - マンの分析の誤りの一つに「資料の取り上げ方」を挙げておいた。これは、カロッサのナチス期の「国内亡命」＝「精神的抵抗」を論ずるなら、主として戦後に書かれた『狂った世界』を取り上げるので

はなくて、まさにナチス期に書かれたものを取り上げるべきだろうと言うことを指摘しなかったからである。ただ、ツィンマ・マン自身は当時のカロッサの「作品の中から証拠を提出することはほとんどできない」(674頁)と確信しているからには、これは認識の違い、解釈の違いの問題に帰するのであって、実は、われわれは全くそう考えていないということである(後述)。

## 5 ツィンマ・マンのカロッサ批判の第三点の検討

さて、ツィンマ・マンの挙げる第三の証拠、カロッサが1941年秋「ヨ・ロッパ作家連盟」の会長に就任したことについては、ナチス期のカロッサを論じて言及しない者はいくらも有名な事実のようである。ナチス期におけるカロッサの「精神的抵抗」「国内亡命」を疑わせる、カロッサの恐らく唯一の「汚点」と考えられているものである。実は冒頭に引いたルカ・チの「買収」問題もこれに係わる。ともあれその「事実」とは、1941年秋のある日、ワイマル、午前11時から午後4時まで、宣伝省の役人、高等参事官、宣伝省官房長官との会談の後、カロッサが渋々会長役を受諾する(ルカ・チによれば、ここで「買収」が成立ということになる)と、すでに集まっていた各国の作家達による全く形式的な選挙で、一分足らずの間にカロッサは「ヨ・ロッパ作家連盟」(7)の会長に選出されてしまったという事件である。

この経過について、戦後になってからの文章であるが、カロッサ自身の弁明を聞こう。『狂った世界』(139～52頁)できわめて詳細にその経緯を述べている。さて、

消息通の一人の婦人読者がベルリンからの極秘の手紙で、私が例の「読書週間」とか「詩人会合」の名の下に毎年宣伝相臨席の上で催されるワイマルの会議に一

度も出席しないので、文芸局の数人のお偉方が私に対する疑念を口にしたりしてきてきた。私はこの心配そうな警告を1941年秋に受け取った…。

カロッサはこの秋(ドイツの)西部および中部での「朗読の夕」を開く約束があったので、道すがら、二日間ワイマルに立ち寄り、「ワイマルの会」に出席する旅行計画を立てた。ワイマルに着いて第一日目、カロッサはあっけにとられる。もうすでに「見渡せない程沢山の詩人たちがこの会に出席するために集まっていたのである。二日目、午前11時、宣伝省(ゲッベルスが大臣である)の役人がカロッサに会見を求めてきた。

私に話し掛けた最初の役人は、初めは協会創立のことには少しもふれないで、唯いかにも何でもないように、夕食後外国人たちと一緒に会合することを雑談的にはなし、その時いわば学生のコムパの様に座長をしてほしいといった。

「学生のコムパ」とは、いささか次元が低いか。カロッサは、だから、「気楽にそれを断って」党に属している作家」を推薦した。その次に出てきたのは若い宣伝省の高等参事官で、強硬にカロッサを説得するように命じられてきたようである。この若い参事官との会談で、カロッサは次の様な感想をもった。「復讐の女神たちの合唱が避けがたく近づいて来れば来るほど、指導部は彼らの妖怪じみた仮面舞踏会と一緒に踊ろうとしないものを、誰でも敵として取り扱おうとますます狂暴な決意を固めていた」と。カロッサは誰をもこの「妖怪じみた仮面舞踏会」に引きずり込もうとする権力の強い意志を感じ取った。「そして他ならぬ、この危険な幽霊芝居に絡みつかれたという感じが、私の抵抗力を弱めたのだ」。カロッサは軟化しはじめていた。そこに第三の男、宣伝省の官房長官が登場する。ここでカロッサはついに会長(=議長)就任を承諾してしまうのであるが、その間の

彼の心理の揺れ動きに注目したい。カロッサの戦後の回想文は極めて忠実にかつ正直にその時の心理を再現していると判断される（理由は高橋健二氏の後文を参照）。カロッサの「弁明」の言葉をきくことにしよう。以下、①から③までの三つの段落に分けたが、カロッサの原文に添っているので、引用はいささか長くなるけれども、カロッサがなぜ「会長」就任を引き受けたかその心理過程が述べられている。

- ①彼（官房長官のこと - 三石）が最後に「この問題はドイツにとって重大なことで、それがあなたの諾否にかかっていることを考えて下さい」と言った時、それは半ば嘆願する様に、また半ばは脅迫する様に聞こえた。そこで私は彼よりもはるかに有力な人の意志（ゲッベルス - 三石）が彼の口をかりて述べられていることがわかった。
- ②私は今全体主義政府のわなに落ち込んだ以上どんなにむりに抜け出そうとしても自分の首をますます強く締めるだけのことだということを全く冷静に承認した。そして私が意識下のものを心の中に働かせている中に、突然またもや医師的な心境、即ち私の相手になっている人のに身に成り代わって自分のことは無視するという、数十年来慣れた能力（注意！後述 - 三石）が表面に押し出してきた。
- ③官房長官は、……本当に疲労している様に見えたので私は彼と彼の仲間に同情を感じはじめた。畢竟するところ彼等も皆同じ軍船に奴隷として鎖につながれている訳なのだ。……そして一緒に摂る晩餐会の先に行なわれる様に既に予定されている選挙の時、私が彼等に沢山の外国作家の面前で拒否の返答をしたならば、彼等が一体どんなに困った立場に陥るだろうかと考えてみると、直ぐに私は、そんなことはできることではないと簡単に認

めずには居れなかった。おまけに拒絶したら今後私は全然よい意味での影響力（ナチスによる被被害者の救済のこと、後に触れる - 三石）を奪われる訳だ。…

この「弁明」をどう読むか？ 戦前戦後、カロッサと翻訳を通じて直接面識のあった高橋健二氏は、カロッサ50歳（1928年）の時の作品『青春変転 *Verwandlungen einer Jugend*』の中の一挿話を引きながら、この間の事情を次のように分析している。

カロッサが15才の時、彼は無実の罪をさせられ、ギムナジウムの舎監から、一方では極めて高圧的に、他方では極めて低姿勢に懇願され、「私に白状させようとかんなに苦心している人を、拒絶によって繰り返して傷つけることは、不当で、人情知らずと思われた。そして、思いがけぬ満足を与えてやろうという衝動が、押さえがなくなった」という文章を引き、次のように述べる。

カロッサは情にもろい弱さに負けたのであろう。やさしい性情ではあるが、まぎれもなく性格の弱さである。…この時のいきさつは、カロッサが後に、ナチスの芸術院入りを拒絶しながら、欧州作家連盟の会長就任を結局受諾したのに、心理的に似通ったところがある。心理的な圧迫に耐えかねて、折れてしまったのである。…くどいことはたくさんだ、本心は、わかる人にはわかる、わかろうとしないものに反対しても意味がない、そういう貧血症的あきらめが、そうさせたのであろう。もちろん、その時には、自分がそういう地位につくことによって、人助けができる。最悪の状況の中で、いくらでも救えるものを救うことに、その地位を利用しよう、という無言の心配りがあった。そしてそれはある程度効果的に実行された<sup>(9)</sup>。

上に引用した『狂った世界』にみられたカロッサ自身の心理描写は、②の「数十年来慣

れた能力が表面に押し出してきた」とあるその「数十年来の - -」心情、高橋健二氏がいみじくも指摘するように、遥かこの15歳の少年時代の体験にまで遡ることを示そう。のみならず上記③の記述も全く同じ心理であることも確認できよう。これを高橋氏もルカ - チもカロッサの「貧血症的あきらめ」、性格的「弱さ」に帰し、ルカ - チはここでカロッサがナチスに「買収」されたと考え、ここにドイツ文学の一つの「危機」を見た。ト - マス・マンも1942年8月の「ドイツの聴取者諸君！ Deutsche Hörer!」(BBC放送)で「ゲッベルスが召集した『ヨ - ロッパ作家連盟』が、哀れなハンス・カロッサを議長にして (unter dem Vorsitz des armen Hans Carossa) 北や南、東や西からあらゆる種類のクウイスリング的作家や協力的文学奴隷が参加して開かれた」<sup>(10)</sup>とカロッサを非難した。

## 6 精神的抵抗者 - カロッサ

高橋氏はこの事態を「暴力には屈しはしたが、内容では魂を売り渡しはしなかった」(160頁)と適切に書き留めてはいるが、カロッサの性格的「弱さ」だけに帰しているのが問題である。われわれの「精神的抵抗」=「国内亡命」=「アルカディア - 」の観点からすれば、マンやルカ - チやツィンマ - マンの評価とは全く逆に、カロッサの取った態度は、精神的抵抗の・国内亡命の見事に成功した事例であると考え。やむなく会長(議長)就任を引き受けたけれども、会長職を全くボイコットした事実もあり、カロッサの態度に対しては、いかなる弁解も弁明も必要ない。カロッサの置かれた状況からして、カロッサは最善の道を取ったと考える。カロッサは会長就任を断ることができたはずだ、彼は抵抗しなかったではないかという非難は全く問題にならない。「魂を売り渡さないこと」これが「アルカディア - 」の、「精神的抵抗」の、

アルファ - にしてオメガ - なのである。カロッサは会長を引き受けたけれども、決してナチスに屈伏した訳ではない。高橋氏の上に引用した文章に従って言い換えれば、「暴力に屈してよろしい、ただ魂を売り渡さなければ」ということになる。気の弱い人は気の弱いなりに、あたかも風にそよぐ葦のように、悪魔のナチ体制への変幻自在の対応があつてよろしい。強い風にポッキリと折れてしまう巨木ではなくて、その人の置かれた状況、その時の権力の在り方、そしてその人の性格的なもの、そういった全てを含めてそれぞれがさまざまな精神的抵抗を行なうことが大切なのである。戦いのやり方にもさまざまなものがあるということを銘記すべきであり、華々しく戦って、華々しく散ることだけが戦いではない。

上に見たように、カロッサ自身すでにそう述べていた。すなわち第一の証拠を検討した際に、カロッサは「重々しく憤激」しないで、「自尊の意識の残りをせめて心の中に維持する」と述べていたのを想起ありたい。その意味で、カロッサと同じく「気の弱い!？」人であっても、少なくともナチス体制に対しては心の中で激しく「ノ - 」と叫びながら、外面的には体制に「順応」した多くの人々をも、われわれは立派な「国内亡命者」として遇することが必要なのである。

以上われわれは、カロッサ批判の典型例であると見られるツィンマ - マンの論拠を検討し、われわれの「精神的抵抗」=「アルカディア - 」の立場を明確に提示し得たことで、カロッサの「冤罪」を晴らし得たものと考え。実はすでに述べたように、ツィンマ - マンのカロッサ批判は、カロッサが戦後に書いた弁明の書『狂った世界 Ungleiche Welten』に全面的に依拠していたことが問題で、われわれはカロッサがナチス期に書いた作品から「精神的抵抗」・「国内亡命」の「証拠」を見出し得るのか否かを改めて検討しなければ

ならない。クリンクナ - やスネルといった古典文献学者達のような（彼らは古典研究に託して婉曲的にナチスを批判した）あるいは法哲学者ラ - トブルフ（「暴君殺害論」を論じてヒトラ - 暗殺を肯定した）のような、あるいは作家シュテファン・アンドレスの作品（『エルグレコ大審問官を描く』）のような、極めて婉曲的な、極めて巧みなナチス批判が果たして彼の作品から見出し得るのであるだろうか？

## 7 ショウナウア - のカロッサ批判

1961年、ツインマ - マンより丁度20年前に書かれたフランツ・ショウナウア - 『第三帝国のドイツ文学』<sup>(1)</sup>の最後の「精神的亡命」の章は、カロッサのナチス期の作品を取り上げて厳しく批判している。本書はすでに絶版になっており、入手しがたいと思われるので、いささか長くなるけれども、カロッサに関する部分を省略なしで全文引用することにする（174～178頁）。ショウナウア - がいかなる観点から、どのようにカロッサを批判判断しているか注意深く読み進めていただきたい。とりわけショウナウア - がカロッサの精神的理想郷を「アルカディア - 」と呼んでいること、つまり、われわれと同じように「アルカディア - 」という言葉を使い、それを「安らぎ」・「慰め」に満ちた共同体と理解しているだけに、ショウナウア - のカロッサ批判が注目されるのである。以下、引用文も含めて、全てショウナウア - の文章である。ただしショウナウア - の文中、留意すべき点については「(三石コメント)」をつけた。

第二次世界大戦勃発の一年前に、ハンス・カロッサは、権力の騒々しい叫びで反響している民族社会主義のドイツ国の真っ只中で、『現代におけるゲ - テの影響』について述べ、この演説を次のような告白で終えている。

そうだ、諸君、われわれはゲ - テ疎遠の心配なんか少しもするまい、ドイツにおいても外国においても！ゲ - テの守神の最大の作用は今やっと始まったばかりだという兆候は増しつつある。ドイツの最もよき人々の中には一つの憧憬が生きている - - 存在の単純化への・灼熱する中心への・あらゆる拘束力ある中庸への・諸国民がそれを求めて遍歴し寄る永遠の像に充ちた神殿への深い憧憬が。しかし個々の人の精神のうちに生起するものからこそ世界の運命は生育する。ゲ - テの、時代に制約された多くの意見はその妥当性を失うかもしれぬ。あれやこれやの第二義的作品は色あせるでもあろう。しかし諸々のエネルギー - を充填したあの本質、形象と歌の生まれ出てくるもとたるあの本質は、碎かれることのできない不可視のものの中に生きている。この本質にわれわれは信頼しよう。ディオニソスが祝福を与えて以来葡萄の樹は決して再びその恵みの力を失うことはないであろう。そして人類が数世紀間の凋落した知識の重荷から免れるために、数百万の書物と絵像を火に投げ入れる大焼却祭にも、火付け役はゲ - テのそばを素通りするであろう。しかしまたいつか印刷された書冊の頁が火中されたとしても、父性的な核心は焼失しはしない。時充つればその核心から常に繰返し光の波と愛の波とが国民と人類の中に奔入して新しい形態を生み出す。それについては誰人も、ゲ - テを否定する者も驚嘆する者も、内密のうちに知っている。そしてゲ - テを激しくけなす或る文筆家に、その人の書いた風景描写を読んだ後で、「これはまことに美しく真実で、ゲ - テが書いたかと思われるくらいだ」と私がしずかに言ったら、彼は我を忘れて、その顔は喜びと誇りに輝いたのであった。われわれは、

去る者も来る者も、この教団の信徒たることを告白しよう、もし精神と心情の国が征服されないでいるならば、世界中の国土と大洋とを手に入れても満足できないような人々の教団の信徒たることを！

(12)

ゲ - テの、世界を和解させる人間性への信仰告白から生じる慰めと確信とが、1938年に講じられたのである。しかしこの講話に内在する宿命的な詭弁は認識されなかった。なぜなら、この講話は、ドイツでなされたので、この国を無理矢理に人道主義的伝統の中にくみ入れ、損なわれない精神の王国が存在するということをふまえていたからである。いいかえれば政治的、社会的関係を通して、素朴にも精神の非腐敗性から出発したこのようなゲ - テ論は、民族社会主義を危険に落し入れることができないばかりか、むしろその悪化を助長するものになってしまったのは当然である。とにかく作家個人が書き、書物を出し、それで絶対的非精神だと証明したり、それを正当だと認めたことは、第三帝国のドイツ市民文学の悲劇である。

(三石コメント) ショウナウア - のこのカロッサ批判の核心は、カロッサの作品がゲ - テ讃歌を高唱することで「損なわれない精神の王国」がナチスにもまだ存在することを内外に知らしめることになり、ナチス政権の「健全性」を逆に証拠だてることになり、ナチスの悪魔性を容認・助長させることになった、そこにはいかなる意味でも抵抗の精神はないということになる、と断罪している。しかし、われわれはこのショウナウア - の見解には賛成出来ない(後述)。

この作家が文学を慰めとして、逃避として提供し、自らを「静かな忠実なる同伴者」として売りに出しながら、かれは現実から離れ、恐怖の世界の中で、非常に技巧的アルカディアを、そして繊細で社会的に効果のある自己

欺瞞の可能性を作り出した。たとえば、ハンス・カロッサの作品を手にとればわかるが、彼の読者は、ナチ支配の間に相当増え、緊密な協会が組織されたのも偶然ではない。この詩人の、すなわち慎重に生活の典型を、自分の伝記を例にとりながら象徴的に記述しようとした男、医師という天職を心底確信し、この円熟した男のゲ - テに並ぶ作品は、信頼の念を呼び覚まし、気軽に近づける慰めの媒体である。カロッサの書物は当時多くの人々にとって、騒々しいあらゆる日常の出来事にもかかわらず、創作の秘かな、それでいて明確な意味も、同時に人間の意味も汚されていないという幸せの確信の使者であった。彼の成果は、彼の物語や詩から由来する牧師的作用にあり、またこの作家の書いたたいていものが慰めの言葉として引用できる可能性をもっていることにある。

(三石コメント) ショウナウア - のここでのカロッサ批判の核心は、カロッサの作品が人々の目をナチス政権の恐怖の暴虐体制から目をそむけさせ、「理想郷・アルカディア - 」に逃避させてしまうものであって、その結果、ナチス体制に対する抵抗を麻痺させ、その悪しき体制を容認させてしまうという「自己欺瞞」性を広範に生み出させた、というにある。その傾向は彼の最も人口に膾炙している1910年の作品『古き泉』の詩もそうだといい、次にその詩の全文を引用している。われわれはショウナウア - のこの見解にも賛成できない(後述)。

『古き泉』の詩はもともとその詩的なるがゆえに有名になり、一般に好まれるようになったのではない。時代の苦悩、苦難に対する雛型として引用でき、また人間が全然希望のもてない状況にあって、なお心から喜んで信じたい希望を約束するものとして引用できるからであった(13)。

お前の明かりを消して休むがよい  
ただ古い泉からは いつも休まぬ  
泉水の音がひびく しかし  
私の屋根の下で客になったものは  
いつもすぐにこの音になれた

お前が夢をみているとき 家のまわりに  
足音のすることも  
泉のそばの小石が荒っぽい歩みに  
ざくざくと音をたて  
さえた水の音が突然かき消される  
お前は目ざめる - 驚いてはいけない  
星は満天に静止し  
ただ旅人だけが大理石の水盤に近づき  
手をくぼめて泉の水をすくう

彼はすぐに立ち去る 音は時を知らない  
喜べ お前は孤独ではないのだ  
幾多の旅人は星影の中を歩み去る  
そして  
まだ多くの旅人がお前の途上にあるのだ

実に美しい詩だ。しかし、すでにのべたごとく、この詩句の美学から当時決定的効果がでたのではなく、人間は創造の静かなる秩序のなかで、自らの場を失うことなく所有し、またこの世界を故郷とし、世界を信頼できるのだという福音からでたものであった。

以上でショウナウア - のカロッサ論は終わる。ショウナウア - のカロッサ批判の核心は、カロッサの作品の「現実逃避性」にあり、まさにこの「逃避性」こそが、人々に諦観を生み出させ、さらにその結果としてナチス助長のアリバイにもなったというにある。繰り返し言えば、ショウナウア - が「宿命的詭弁」とか「自己欺瞞」とか言ってカロッサを非難するのは、彼の作品がナチスの「恐怖の世界」の真っ只中で、人々を「安らかな・慰めに満ちた・人間の意味も汚されていないという幸

せの確信」をあたえる「アルカディア - 」に人々をいざなって抵抗の精神を萎えさせ、かつそれがナチスの悪魔の体制を内外にそれほど悪くはないと思わせる「アリバイ」になっていてナチズムの存続を助長したという点にある。カロッサらの作品がナチスの悪魔的所業隠蔽工作へのアリバイ作りに一役買ったと言う非難は、すでにペ - タ - ツインマ - マンも指摘していた。

ショウナウア - のカロッサ批判は第三帝国時代のドイツ市民文学の評価如何という文脈の中で取り上げられたものである。ショウナウア - はいう。

この文学（ドイツ市民文学のこと - 三石）は、それが第三帝国時代、ヒトラ - 体制の犯罪的策略に対し嫌悪の念をもち、ドイツ市民階級の個人的、人間の本質を守るのに役立つがぎりは人道的機能をもっていた。しかしこの嫌悪感を実際の精神的抵抗にも、効果的な政治的抵抗にも至らなかった。...いわゆる精神的亡命の文学は逃避であった。田園への逃避か、素朴な時間を超越した人間関係への逃避か、伝統主義への逃避か、古くから馴染みの真理や不変なるものをことさらに強調することへの逃避か、すでに実証ずみのもの、すなわち問題性のないものへの逃避であった。わけても卑俗さと野蛮さを前にしての美と高貴さと永遠なるものへの逃避であった（173頁）

ショウナウア - の批判は果たして正鵠を射ているのであろうか？ 実はショウナウア - の「アルカディア - への逃避」という批判には、混同してはならない二つの問題が含まれていると思われる。まず一つはこの「逃避」が果たして「諦観」とかナチス体制への「容認」に通ずるものなのか否か（つまり「精神的な抵抗」があるか否か）という点、他の一つは、このような「内面への逃避」がいかなる「政治的抵抗」も生みださず、ナチス体制

の存続を「助長」し、かつナチス体制を隠蔽すアリバイ工作になったという指摘である。前者の問題は、カロッサ文学（広く一般にナチス体制下のドイツ市民文学）における「精神的抵抗」の有無の問題、後者の問題は一般に文芸作品の政治的効用や社会的影響に関わる問題である。

まず、叙述の関係から、後者の問題（文芸作品の政治的効用・社会的影響の問題）を先に取り上げる。この問題は要するにカロッサらドイツ市民文学の「内面性」＝「逃避性」は結局ナチス・ドイツの「健全性」を国内・国外に立証するアリバイの役割を果たしたという非難である。われわれの結論は以下に示すようにきわめて単純である。つまり文学作品がどのように読み取られるかは原作者の意図とは全く無関係であり、かつ文学作品を政治的支配者がどのように利用するのかも、同じく原作者とは全く無関係であること、したがって原作者の真の意図が「精神的抵抗」に在りさえすれば（この事は大切）そしてそれが「婉曲的」・「巧妙」でありすぎて味方すらもその真意を見抜けず、敵すらも誤って（！）これを称賛したとしても、彼の「精神的抵抗」は美事に成功していると考えべきである。ナチス・ドイツの「健全性」を証明してしまった？ それなら、それこそ大変美事な成功例ではないかと考える。かつまた、たとえ宣伝相ゲッベルスが意図的にそのような宥和政策を取った結果であったとしても、なおそれは美事な成功例と言うべきなのである。

## 8 カロッサの精神的抵抗の具体相

次に、前者の問題つまりカロッサのナチス期の作品から「精神的抵抗」の精神を読み取れるか否かの問題を取り上げる。カロッサのナチス期の言論の一例として、われわれもショウナウア - が引用した『現代におけるゲ -

テの影響』を用いることにしよう。ショウナウア - はこの講演がナチス・ドイツにも「損なわれない精神の王国」の存在する事を示すアリバイの役割を果たしたと断罪したが、われわれはこれをカロッサの「精神的抵抗」の見事な成功事例と考える。すなわちここで、カロッサは、ゲ - テの偉大性を大いに賛美し、ナチスの大焚書（1933年5月10日夜間、ベルリンのオペラ広場の焚書に代表される）に言及して、たとえ焚書に遭ったとしても焼失しない「核心（種子）」があり「その核心から常に繰り返し光の波と愛の波とが国民と人類の中に奔入して新しい形態を生み出す」と述べて、「強制的画一化」に順応しない者、「焼失しない核心」が存在し、それが新しいものを作り出していくのだと断定している。こういう弁証法的思考はカロッサの基本的な認識方法であることはすでに言及した。しかも、ショウナウア - が引用した、上記のカロッサの講演の最後の部分に「もし精神と心情の国が征服されないでいるならば」とあるが、「もし」と仮定法になっているのもレトリックとして極めて巧妙で、真意は「絶対（！）精神と心情の国は征服されない」という決意を表明していると思われる。

上に検討した『現代におけるゲ - テの影響』は1938年6月ワイマルでの講演であるが、それからほぼ二ヵ月後の8月28日ゲ - テの誕生日にはフランクフルトで「ゲ - テ賞」受賞に対する「式辞」を述べた。ここでカロッサは、時代を越えて「自分の最も内的な使命を果たす真の形成者」、「時代の変転によって自らを試練」するゲ - テ像を強調し、「世界像がもはや統一を失っている今日の時代」に「義務を知らぬ夢の世界に逃避して自己を見失う」危険をゲ - テは知っていたと述べ、さらに「支柱、円柱は打ち砕くことはできるが、自由な心を砕くことはできない」とも強調した

のである。これらの言葉は全て、明らかに、「夢の世界に逃避」することを拒絶する「文学的抵抗」、「精神的抵抗」の精神の高らかな表明ではあるまいか。ツィンマ - マンのカロッサ批判を検討したとき、われわれはすでに「アルカディア - 」の観点から、カロッサを見事な「精神的抵抗者」と規定してきたが、ここでも全く同じ事が言えるのである<sup>(14)</sup>。

ところで、ショウナウア - はカロッサら「ドイツ市民文学」の「逃避」先を幾つか挙げてくれた。それは、「田園」、「素朴な時間を超越した人間関係」、「伝統主義」、「古くからの馴染みの真理や不変なるもの」、「すでに実証済みのもの、すなわち問題性のないもの」、「美と高貴さと永遠なるもの」等である。これらの事例こそ、実は「田園」(ウエルグウスの『牧歌』に見られた「田園の理想郷」を原型とし、ドイツ農民文学やナチスに迎合した三流の「ブルー・ポー (Blut und Bodenの略)」文学にも見られた所の田園)に象徴的に代表されているように、われわれの言う「アルカディア - 」つまり「やすらぎ otium」に満ちた小共同体の具体例にほかならない。いわばウィリアム・エンブソンの言う「牧歌の諸変奏」<sup>(15)</sup>にほかならない。ショウナウア - はこういったものへの依拠を「逃避」と断定した。しかし、カロッサの場合、上に見たように、ゲ - テの世界への「沈潜」は決して「逃避」ではなかった。そこには静かな、しかし確固とした「精神と心情の国」があって、これがナチス政権への暗黙の、不退転の「精神的抵抗」の原点・出発点・根拠地となっていたのである。「強制的画一化」を拒否する抵抗の根拠地をしっかりと保持しているのである。カロッサにはたしかに性格的な弱さ・優しさがあつたが、しかし「魂」までナチスに売り渡した訳ではなかった。1933年10月29日、ト - マス・マンは『日記』に「清らかにかつ美しく書かれたカロッサの人生の書『指導と信従』を心から満足しながら読む」

<sup>(16)</sup>と書き留めていた。マンですらカロッサに「心からの」満足と慰めを見いだしつつ、ナチスに対する新たな闘争心を奮い起こしていたのであって、ナチスから・現実から「逃避」していたのではなかった。

こういった事実は、戦後カロッサの日記や書簡集が出たことによって、完全に実証される事になった。以下、この具体例を幾つか挙げる。1933年1月31日ヒトラ - 政権が成立した直後、カロッサは早くもこの運動に危惧の念を抱いた。1933年3月22日の手紙<sup>(17)</sup>に、ミュンヘンの広場にハ - ケンクロイツ旗が掲げられ、若者たちが「興奮状態に引き込まれて」いることを指摘しつつ、

このように多くの芝居がかった傲慢さで始まる出来事が良い結果を告げ得るかどうか、しばしば強い疑問を覚えるのです。こんな時世に仕事に生きることが出来るとは、事の成否に関わらず、誠に果報なことです。

1933年5月8日の手紙に、

今ヴァレリ - (カロッサの妻 - 三石) が『最新情報』紙を持ってきた。その記事に私が文芸院に招聘されたとある。ト - マス・マン、それにアルフレ - ト・モンベルトも脱会する。私の憤ろしい気持ちかどんなものか、とても口に出しては言えない。その上、キ - ルにおけるヒトラ - の演説まで載っている。世に醜悪なるものの最たる見本だ。このニュー - スの紙面は取っておいてお前に見せよう。最善の策は、出来ればこの国を去ることだ。

同5月17日の手紙に、上記文芸院への「招聘」を断った理由を述べている。

文芸院への招聘を謝絶したことを認めれば、大変な失望をおかけすることになるうとは思いますが。謝絶した文言は、本状に同封します。大臣ルスト氏には謝絶の理由を全部書くわけにはいきま

せんでしたが、あなたには最も重要な理由を申し上げておこうと思います。改造されたこのアカデミ - のように国家の強力な干渉の下に置かれた機関には真の主権というものがなく、従ってそれと共に本当の尊厳もないということなのです。新しい国家がいかなる機関を設立しようとそれは勝手ですが、私としては自分の小さな精神の帝国を自由に束縛されずに守るつもりで、それが国民に奉仕する最善の道だと固く信じているのです。

この三通の手紙の引用を一読しただけで、カロッサが骨の髄までのリベラリストであり、しかも「こんな時勢に仕事に生きることが出来るとは - 誠にも果敢なこと」と言っているのは、作家として時代の証言者たらんとしている絶大な自信に裏づけられた言葉と言えるであろう。カロッサは、「最善の策」としての「国外亡命」の道を取ることをせず、敢えて「こんな時勢」の真っ只中で困難な「国内亡命」の道をたどることになる。それが可能になるのは、彼の中に「精神の帝国」=理想的景観である「アルカディア - 」を断固保持しているからである。

ナチス期におけるカロッサの書簡には、冷徹な現状分析と権力批判の精神が満ちあふれていて、大変興味深い。以下臨川書店の『全集』所収の書簡から興味深いものをいくつか引こう。例えば、ニ - チェが「最初の突撃隊の士」(1933年7月14日)との指摘、ゴットフリ - ト・ベン批判の文(33年8月26日)、今のドイツには「二種類の間人」が居ること(34年9月8日。これについては既に言及した)、また「国内亡命者」としてナチスの検閲に引掛からないよう、細心の注意を払って執筆している事が窺われる。これについては、その手紙(一部分)を引用する価値がある。次のように言う、

他でもなくこうした本(『指導と信従』

のこと - 三石)を書いたために、やがて一文一文が事細かに調べられることもあるでしょう。だからと言って率直な筆の運びを曲げる気にはなりません。しかしそれだけに自分の体験をさらに精神で浸透し、極めて忠実なヒトラ - 信奉者でも、また信心深いカトリックやその他何を信じている者でも、ここに書かれていることには思わず同意せざるを得ぬよう努力しなければならないのです(35年7月22日)

カロッサのゲ - テ講演がヒトラ - ・ユ - ゲントの不興を買ったこと(38年6月11日)、ヒトラ - 直々の党大会への招待を受けて困っていること(38年9月1日)、ヴァマル文人会議を断ったために発禁処分(国家反逆罪)を受けるかもしれないと危惧していること(38年10月21日)、作家としての自負と時代の困難さ(39年2月5日)、ヒトラ - の誕生祝いの詩(たった二行)を旧詩から取ってでっちあげたこと(39年2月22日)、なおまたカロッサは自分の作品が「反共産主義的作品」とみなされて「不機嫌」になっている(39年7月5日)が、われわれの見るところでは「敵」である「ナチス」に「反共」と評価されるのは、むしろ名誉であると評価できる。またすでに触れたことであるが「ヨ - ロッパ作家同盟」の会長(議長)に祭り上げられた事(41年12月22日)は、カロッサの柔軟な状況対応策として、われわれは、高く評価するものである。反ナチス行動を支持(42年7月28日)したこと、「作家同盟」大会をボイコットしたこと(42年11月8日)、ナチスの犠牲者の救済活動(44年7月22日、44年12月3日、45年3月24日)を行なったことなどが判明する。

カロッサの手紙を一読すれば、彼がいわば「人道主義」を盾にした筋金入りの作家であることが判明する。苛烈を極めるナチス体制下であって、これだけの精神の孤高を保ち得

たのは驚嘆に値する。カロッサはわれわれの言う「国内亡命者」「アルカディア - 」の立場を貫いた希有な例であろう。ナチスに屈伏したという評価はまったくの冤罪であると断定できる。彼は最後まで「魂」を売らなかったためである。

もちろん、「魂」を売ったか売らなかったかは、あくまで個人の「心・精神」の問題であるから、その判定はカロッサのように明白な「証拠」がないかぎり困難である。戦後多くのドイツ人は実は自分こそが「国内亡命者」「精神的抵抗」者であったと主張したという。次の文章を見ていただきたい。ここでは、以下に見る理由で「沈黙の抵抗」をした者を「抵抗者」と見ることは出来ないと断言している。

ナチ時代を語る会が戦後になって開かれると、参加したドイツ人は自分たちがヒトラー - に反対したことを語った。だが、彼らのこうした自負は曲者である。たとえば、秘かにヒトラー - を非難していた政治学者のマ - ガレット・ボベリの場合、彼女の友人には第二次世界対戦中に「赤いオ - ケストラ」「ロ - テ・カペレ」1942年8月発覚 - 三石) 計画に参加した人たちがたくさんいた。しかし彼女自身は、ヒトラー - は国民の合法的指導者であるのだから国民には彼に反対する権利はないという「愛国的」な理由で、こうした抵抗運動に反対している。...しかしこうしたご都合主義を取っていた何百万という人々には、1945年まではナチズムに忠誠を誓い、その後連合軍の占領部隊がくると、自分は初めからヒトラー - に反対だったのだと断言することが出来た...(18) この例で「ご都合主義」と言われているケースは、われわれもまた「国内亡命」「精神的抵抗」の事例に加えることは出来ない。ならば、「ご都合主義」と本物の「国内亡命」の区別はどこにあるのか。このことは、第三帝

国における抵抗研究のきわめて早い段階で、保守的と見做されているドイツの歴史家ハンス・ロ - トフェルスが『第三帝国への抵抗』(19)の中で、「教授やジャー - ナリスト、作家や芸術家たちは...ある程度まで一国民の良心を代表する、ということが正しいとすれば、実際問題として、どんな基準でも厳しすぎるということはありません」と指摘しつつ、しかし、にもかかわらず、このロ - トフェルスも「ナチ活動のいかなる兆候も示さなかったということは、すでに一種の反対であり、あるいはそれ以上に、抵抗の潜在的形態であった」こと(31頁) また「精神的な持続性が存在すること自体にすでに一種の反対が認められうる、たとえそれが消極的なものでしかないとしても」(46頁)と「精神的抵抗」「国内亡命」を認めている。このような反ナチスの・「強制的画一化」を暗々裏に拒否する「抵抗精神」の持続性(具体的付帯条件としては、一貫して味方を背後から密告しなかったか、魂を売らなかったか)こそが、ここで言う「ご都合主義」とわれわれの言う「アルカディア - 」という立場との違いである。ツィンマ - マンやショウナウアー - が極めて厳しく、極めて狭く「国内亡命」なる概念を用いるのはこのような「ご都合主義」を排除するためであった。同じドイツ人として、ナチスの悲劇を二度と繰り返すまいとの強い反省が、強い使命感がそうさせていると考えられる。「個人的、人間の本質」を失うまいとした、善良な気の弱い市民の無抵抗な、なしくずしの現状追認をこそきっぱりと否定しなければ、再び悪魔の体制を許すことになるうとの強い危惧があると考えられる。

しかし、にもかかわらず、われわれは、ここで敢えて「沈黙の抵抗」「精神的抵抗」なる立場の重要性を強調したい。日によって、あるいは時期によって、自分の確信が時に揺らぐことが在っても良からう。しかし、直ちに思いなおして、抵抗の精神を掻きたて燃え

上がらせ、にもかかわらず、華々しい政治活動を一切せず、静かに「沈黙の反対」を続ける人、カロッサの文学はそういった人たちを、そういった多くの無名の人々を勇気づけたと判断される。たとえばカロッサの美しい『古き泉』を読んだとしよう。人はその美しい調べ、その幻想的な詩句に惹かれて、「慰められ」、「抵抗の精神」を失い、現状を肯定し、ナチスに迎合していくのであろうか？ いや、決してそうではあるまい。カロッサの小説、カロッサの詩を読みひたり、次に改めて現実のおどましい狂気の世界と対比するのではなからうか？ そして改めて失われたものの偉大さ、高貴さに思い至るのではなからうか。それは「逃避」の感情ではなくて、ナチスの世界とは全く異質の世界があることを知らせ、改めて日常の狂気の世界をはっきりと認識させ、再びまた勇気を持って「沈黙の抵抗」を敢行していく精神の糧となるのである。単なる「慰め」の境地に引き込み、人々の心から抵抗精神を奪い取るのではなく、新たな密やかな抵抗のエネルギーをその詩句・文章から静かに受け取るのである。

ツィンマ - マンやショウナウア - は、作品から「慰め」や「心から信じたくなる希望」を読み取った読者は「慰められて」非政治的になり、抵抗の精神を失い、現状をなしくずし肯定し従順にナチス支配を受け入れてしまおうと考えている。沈黙は必ずしも現政権の肯定に至るのではない。カロッサの詩文を読むことで、政治的・行動的な「決定的結果」(177頁、ショウナウア - )を期待するのは、この苛烈なナチス体制下にあっては、そもそも間違いなのである。もしカロッサの詩文を読むことで出てくる「決定的結果」があるとすれば、それは抵抗の精神の密やかな・個人的な・新たな持続性なのである。こういって、「では反対せず、ナチを容認してよいのか」という疑問が出てくるかもしれない。わたしの答えはこうである。「反対の行動を起こさ

なくて宜しい、ただ、現在の自分の身の回りに見られる政治体制の悪を、悪に加担するものの姿を、克明に書き取り、正確に描き取り、しっかりと脳裏に刻み付け、それを歴史の証言として残せ、シュテファン・アンドレスの描くエル・グレコのように」と。これが「アルカディア - 」の、「精神的抵抗」の、「国内亡命」の、そして「市民的抵抗」の一般市民に向けての方法である。自分の専門領域をもっているものは、その専門領域の研究をひたすら続けること、たとえばエルンスト・ロ - ベルト・クルティウスがナチスへの怒りを研究心に昇華させて『ヨ - ロッパ文学とラテン中世』を完成したように<sup>(20)</sup>。

また、これら「国内亡命」の作家たちを論ずる場合、大上段に振りかぶった一般論や断章取義は避けなければならないということである。すでに何度も引用したけれども、(西)ドイツの権威在りとされているフリッツ・マルティ - ニ『ドイツ文学史』は、国内亡命の人々、ヴェルナー・ベルゲンリュン、ラインホルト・シュナイダー、ル - ドルフ・アレクサンダー・シュレ - ダ、マンフレート・ハウスマン、リカルダ・フ - フ、シュテファン・アンドレス、エルンスト・ユンガ - を挙げつつ、「エルンスト・ユンガ - の、ないしは事情は違うがヨ - ゼフ・ヴァインヘ - バ - の作品を見れば、状況の複雑さわかる。それは、作家の全著作の展開を徹底的に分析・解釈することによってのみ解明され得ることであって、わずかばかりの政治的指導理念によって決定されることではない」<sup>(21)</sup>と指摘している。ある作家とりわけ「ドイツ市民文学」の作家といわれる人々を評価する場合、ワイマル期、ナチス期、戦後期を含めて、「作家の全著作の展開を徹底的に分析・解釈する」事が必要だと指摘は極めて重要と思われる。ただし、この問題は今のわれわれの問題関心からいささか外れてしまう「ドイツ市民文学論」となる。われわれは、従って

ナチス期の一二年間に限って、そこに見られる「精神的抵抗」の持続を読み取ることに限定し、ハンス・カロッサの名誉回復を試みたわけである。

## (註)

- (1) カロッサの作品『カロッサ全集』十二巻別巻一巻(全13巻)が養徳社から1950年代の始めに出ている。引用はこの版による。また、新しい『カロッサ全集』全10巻が1996年以降に臨川書店から出ている。なおカロッサ作品の邦訳書名は訳者によって異なり、一定していないものがあるが、ここでは臨川書店の全集収録名に統一した。たとえば“Ungleiche Welten”は「狂った世界」、「異なる世界」、「等しからざる世界」、「異なる世界」等邦訳名不定であるが、ここでは「狂った世界」とした。
- (2) G.ルカ・チ『ドイツ文学小史』道家忠道他訳、岩波現代叢書、1965、214頁。ナチス崩壊直前の時点で、ルカ・チが強制的画一化によって一元的・一枚岩的な国家が生まれたと見ていることは注意すべきである。ルカ・チのみならず、絶対的多数の者がそのように見えていた。ナチスの強制的画一化は貫徹しなかったこと、ナチス体制に指導の混沌が見られること、といった点が学問的に明らかになるのは、1960年後半以降の事である。山口定『ナチ・エリト 第三帝国の権力構造』中公新書、1981、頁199以下参照。
- (3) これらの人物については、三石「アルカディア - 幻想と政治権力」(『筑波法政』、第21号、1996・9)、「アルカディア - のトリゴノス - ロマニスト達」(同、22号、1997・3)、「アルカディア - のトリゴノス - 暴君殺害をめぐる」(同、23号、1997・9)参照。
- (4) ヤン・ベルク他著『ドイツ文学の社会史』(上下)山本尤・三島憲一・保坂一夫・鈴木直訳、法政大学出版局、1989、上、675～76頁。ベ・タ・ツィンマ・マンは1944年生まれ。執筆時、グッパ・タル統合大学語学文学科助手。
- (5) 引用頁は『狂った世界』(若林光夫訳、養徳社、1954)による。
- (6) カロッサがここでオルテガを引いていることからも理解できるように、カロッサのナチス論は今日で言えば、ナチスの台頭をエリトと大衆との対抗関係で解きわゆる「大衆社会論」にあたる。つまり、エミル・レ・デラ - 『大衆の国家』、ハナ - ア - レント『全体主義の起源』、ジ - クムント・ノイマン『ベヒモス』らの国外亡命の社会学者達の到達したのと同じ見解である。これは興味深い事実であって、われわれは、これらナチスを経験したドイツの学者による「大衆社会論」の「エリト対大衆」という構造はドイツの知的エリトが生み出した極めてドイツ的な学問方法であると考えている。
- (7) 『ヘッセ・マン往復書簡集』青柳謙二他訳、筑摩書房、1985、頁78。これはカロッサの『成年の秘密 Geheimmisse des reifen Lebens』(1936)からの抜粋である。
- (8) 養徳社版全集邦訳では「Europäische Schriftsteller-Kongress」を「ヨ - ロッパ 著作家連盟」(140頁)と訳している。ここでは「ヨ - ロッパ作家連盟」としたが、「欧州作家同盟」、「ヨ - ロッパ作家会議」など訳名は一定しない。臨川書店版『全集』第10巻(144～145頁)の1941年12月22日の「ロジェ・ドウ・カンオパニョル宛手紙も参照。
- (9) 高橋健二『作家の生き方 シュトルム カロッサ ケストナ - の場合』読売選書、1950、頁105～106、頁158～159。
- (10) 『ト・マス・マン全集 評論2』佐藤晃一他訳、新潮社、1979、頁619。しかし戦後、マンはカロッサから『狂った世界』を送られ、その部分を「特に興味をもって読ん」で、「あなたがこの役割を非常な苦悩と危険の中で回避なさったことを知らされました」とカロッサに謝った。「回避」とはカロッサがこの連盟を実質的にボイコットし、一度も出席しなかったことを指す(『ト・マス・マン全集 書簡』浜川祥枝訳、新潮社、1974、頁518、1951年5月7日、ハンス・カロッサ宛)。
- (11) フランツ・ショウナウアー - 『第三帝国のドイツ文学』小川悟・植松健郎訳、福村出版、1972(原書1961)。
- (12) カロッサからの引用文は、『カロッサ全集 別巻 現代におけるゲ - テの影響』(石中象治訳、養徳社、1958、頁39～40)の訳文を用いた。

- (13) カロッサの『古き泉 Der alte Brunnen』はナチス体制下であっても戦後であっても、ドイツ人の痛く好む詩のようである。「戦後の若い世代も、この詩人（カロッサのこと - 三石）に心をひかれていた。同じころ（1948年12月15日、カロッサ70歳の誕生日の頃のこと - 三石）ミュンヘンの新聞が大学生にどんな詩を好むか、というアンケートを出したのに対し、票数ではカロッサの『古き泉』が最高で、ヘッセの『霧の中』が二位、リルケの『秋の日』が三位であった」（高橋健二『作家の生き方』92頁。山下肇『ドイツ文学とその時代 夢の顔たちの森』有信堂、1976、211頁。『世界詩人全集14 ヘッセ詩集』高橋健二訳、新潮社、1967、39頁参照）この傾向は、それから半世紀以上たった今日でも変わっていないのであろうか。

なお、カロッサの「古き泉」は、『詩集（“Gedichte”, 初版1910）』所収の‘Der alte Brunnen’からの引用である（邦訳は『世界名詩大成 & ドイツ編』平凡社、1959、167頁にある。ただし、新しい臨川書店の『全集』第10巻の「年譜」では「古い泉」は1923年の作としている。根拠があつたことだろうか）。この詩の主題は「満天の星のもと、永遠の時の流れの中を、私の家の前の古い泉を結接点として、黒い影の旅人が来たり又去っていく」という一種の無常観であろうか。

カロッサに次いで、ドイツの学生達が好む詩とはどのようなものかいささか興味があろう。念のため、二位のヘッセの『霧の中 Im Nebel』（上掲、『ヘッセ詩集』38頁所収。1906年の作）と三位リルケの『秋の日 Herbsttag』（『世界名詩大成 7ドイツ篇』平凡社、1959、250頁、リルケ『形象詩集』所収、1906年の作）の邦訳を次に掲げておこう。

「霧の中」(ヘッセ)

不思議だ、霧の中を歩くのは！

どの茂みも石も孤独だ。

どの木にも他の木は見えない。

みんなひとりぼっちだ。

私の生活がまだ明るかったころ、

私にとって世界は友達にあふれていた。

いま、霧があると、

だれももう見えない。

ほんとうに自分をすべてのものから、  
逆らいようもなく、そっとへだてる  
暗さを知らないものは、  
賢くはないのだ。

不思議だ、霧の中を歩くのは！

人生とは孤独であることだ。

だれも他の人を知らない。

みんなひとりぼっちだ。

「秋の日」(リルケ)

主よ 秋です 夏は偉大でした

あなたの陰影（かげ）を日時計のうえにお置きください

そして平野に風をお放ちください

最後の果実にみちることを命じ

彼等になお二日ばかり 南国の日ざしをお与えください

彼等をうながして円熟させ 最後の

甘い汁を重たい葡萄の房にお入れください

いま 家のない者は

もはや家を建てることはありません

いま 独りている者は 永く孤独にとどまるでしょう

夜も眠られず 書（ふみ）を読み

長い手紙を書くでしょう

そして並木道を あちらこちら

落着きなくさまよっているでしょう

落葉が舞い散るときに

- (14) カロッサの「式辞」は『現代におけるゲ - テの影響』所収（石中象治訳、養徳社、1958、これは1938年版の翻訳）による。

- (15) ウィリアム・エンブソン『牧歌の諸変奏』柴田稔彦訳、研究社、1982（原書1935）

- (16) 『ト・マス・マン 日記 1933～1934』岩田行一他訳、紀伊国屋書店、1985、頁248。

- (17) 『ハンス・カロッサ全集 10』碓井信二訳、臨川書店、1996、88頁以下。

- (18) クロ - ディア・ク - ンズ『父の国の母たち』姫岡とし子監訳、翻訳工房「とも」訳、時事通信社、1990、157～58頁。

- (19) ハンス・ロ - トフェルス『第三帝国への抵抗』片岡啓治・平井友義訳、弘文堂、1963（原書1958）頁41。
- (20) 「国内亡命」あるいは「精神的抵抗」つまり「アルカディア - 」は、ジョン・ロ - ルズの「市民的不服従 civil disobedience」の一形態である「良心的拒絶 conscientious refusal」あるいは、それより更に「隠密」な「良心的忌避 conscientious evasion」に当たる。ロ - ルズはこれを次のように定義している。「良心的拒絶は、多かれ少なかれ直接的な法的指示、あるいは行政的命令を受諾しないということである。」「その典型的な例は、異教国によって規定された一定の敬虔な行為の遂行を初期のキリスト教徒が拒絶したこと、そして国旗に対する敬礼をエホバの連署人が拒絶したことである。」「その場合、「自分の行動は、自分がある場合に

それをどんなに隠したいと考えても、当局に知られてしまう、と仮定される。それが暗々裏になされうる場合には、良心的拒絶というよりもむしろ良心的逃避 conscientious evasion について語られているといえるだろう。逃亡奴隷法に対する暗々裏の違反は良心的逃避の例である。」（ジョン・ロ - ルズ『正義論』矢島鈞次、篠塚慎吾、渡辺茂訳、紀伊国屋書店、1979、285～286頁）。われわれの言う「精神的抵抗」は厳密に言えば、ロ - ルズの言う「良心的逃避」に当たろうが、「conscientious evasion」を「良心的逃避」と邦訳するのは抵抗の精神を看過した美事な誤訳であって、これは「良心的忌避」と訳すのが良い。

- (21) フリッツ・マルティ - ニ『ドイツ文学史』高木実他訳、三修社、1979、544頁参照。